

中国人若年層の「個人意識」と「集団意識」の葛藤

ーコロナ禍における体験談に見るポジションニングを通してー

王一瓊(大阪大学大学院) 張碩(大阪大学大学院)

1. はじめに

本稿は、新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の発生後、急速に拡大した時期を経験した中国人の若者を対象に、個々人の体験談におけるポジションニングを明らかにすることを通して集団と個人の捉え方を考察する。

欧米人と比べ、中国人を含めた東アジア人は個人より集団を優先させる傾向があると言われている（Nisbett, 2004）。中国では、公衆衛生上の緊急事態の発生時、民衆の「集団主義」を喚起することが緊急事態に対応するのにあたって最も重要だ（関, 2003；筆者訳）という指摘もあるが、果たしてそうだろうか。本研究は新型コロナの拡大を経験した中国人の若者4人を研究対象とし、彼ら彼女らの体験談についてポジションニング理論を援用し、集団的かつ個人的なアイデンティティの構築のプロセスを明らかにし、中国人の若者は集団と個人の関係性をどのように捉えているかを明らかにしたい。

2. 理論的枠組み

本研究は相互行為のナラティブ分析の動的側面に焦点を当てたポジションニング理論を用いる。ポジションニング理論は、ナラティブを行う参加者たちの立ち位置を分析することにより、アイデンティティ研究に着目する理論である。また、社会相互行為の中で生み出されていくアイデンティティを照らし出すナラティブ分析の方法として、Bamberg（2004/2013, 秦訳）はポジションニング分析に3つのレベルを提供している。

本研究では、ポジションニング分析を通して、会話参加者たちが体験談を語る際に、自分自身を何者として捉えるか、また個々人の立ち位置が「集団」と「個人」の間でどのように流動するかの解明を試みる。

3. 調査方法

本研究で扱うデータは新型コロナが爆発的に広がった際に中国に滞在し、武漢封鎖、団地閉鎖、社会の回復などといった時期を経験した20代後半の中国人の若者4名（W, X, L, J）の体験談である。紙幅の都合上、本稿では3名のデータを取り上げ、分析を行った。男女両方の参加者がいたが、本研究では性別差は問わない。インタビューは、1対1でオンラインの形式で行われ、同じ中国人である調査者2名（Z, Y）いずれが半構造化インタビュアーとなり、事前に用意した「印象に残ったエピソード」という話題に沿って、談話を録音した。長さはそれぞれ約30分から1時間程度で、インタビュー調査は中国語で行われた。

4. データと分析

本稿でW, X, Lの語りを取り上げ、合わせて4つのデータを分析する。データ1及びデータ2のWは上海に在住する女性で国営企業の職員であり、調査者Zは日本に滞在している中国人留学生である。以下はWの語りとなる。

データ1 処分を受けた中国の医師の死亡について¹：平常時と非常事態下の「私」

1. W 李文亮のことを覚えているの↑

2. Z うん

¹ 武漢の病院の眼科医、李文亮氏は当局が公表前の2019年12月30日にSNSで感染拡大への警鐘を鳴らしたところ、警察に呼び出され「事実でない情報を広め社会秩序を乱した」として訓戒処分を受けた。李氏は、その後も病院で勤務を続けたが1月下旬に新型コロナウイルスの感染が確認され、2月7日未明に死亡した。自分自身に症状が出てきた頃になっても、中国版ツイッター、ウェイボーで、当局が「人から人への感染はない」とか、「院内感染はない」としていたことに疑問を呈していた。ネット上では李氏の行動を賞賛する追悼の書き込みが相次ぎ、当局に対する批判の声が高まった。

3. W 彼が処置を受けていた夜9時ぐらいかな：私の
 4. WECHAT のタイムラインで、彼もう亡くなっちゃっ
 5. たと言われたり。でも、まだ緊急措置を取っている
 6. と言われたりした。様々な情報があって
 7. Z うんうん
 8. W その時、何というか：その期間が溜められた緊張感
 9. 不安やパニックというか
 10. Z おお：：：
 11. W そして、その時はニュースの透明性など(.)に対す
 12. る疑いもあったから、これに加えて、すごく絶望
 13. だった
 14. Z 確かにね：
 15. W 完全に潰れてしまった@@@。その時
 16. Z：確かに、その時(.)私のタイムラインも、みんな
 17. Z かなり怒っていたようだ
 18. W だよ。今でもその夜の感じをはっきり覚えてる
 19. Z そう。私も。何でこの事が隠されていたのかわかん
 20. ない
 21. W [そう
 22. Z 隠されていなければ、今の状況に至らないでしょう
 23. W そうそう。でも(.)正直に言うと(.)これは現実
 24. だよ。今考えてみて、この事件が起こったのは(0.6)
 25. この事件の発生について、別に驚くことでもないだ
 26. ろう↑
 27. Z うん。
 28. W でも、その時にはかなり怒りを感じてきた。

データ1に至るまで、WはZの質問「何か印象に残ったことあるの?」を受け、自分の体験談を語っていた。データ1では、まず、Wは「李文亮のことを覚えてるの」と質問し(1行目)、Zと共通知識を持っていることを確認し、3行目から李文亮の死に関するストーリーを語り始めた。Wは李文亮の死亡の情報(4-6行目)を言及した上、その後は「その夜の自分」の物語を中心に、不安やパニック、絶望を感じ、ニュースの透明性に疑いがある「私」を描き出した(レベル1)(8-9, 11-13, 15行目)。その後、調査者ZはWの感情への共感を示した上で、怒りの感情があったことや(16, 17行目)、情報を隠蔽する当局に対する不満を述べた(19-20, 22行目)。それに対して、Wは18行目の「だよ」、21行目の先取りの「そう」と23行目の「そうそう」と言い、インタビューの場(レベル2)においては、2人の強い共感を示している。24行目で、彼女は「この事件が起こったのは(場所)(0.6)(这个事情发生在(0.6))」(24行目)と述べ、中国語の「在」は動作・行為の発生する場所や事物・現象が存在する場所を示す機能があるので、コンテキストによると、ここでWは普通なら「中国」という可能性が高いが、録音されていることを鑑み、25行目で「この事件の発生について」という言い換えが見受けられた。続きの「別に驚くことでもないだろう↑」という自嘲気味の話と合わせると、情報を隠蔽することに慣れているはずの中国人としての「私」(レベル3)を演出していると分析できる。つまり、データ1で、Wは体験談による「絶望と怒りを覚える私」をZと共同構築しつつ、情報を隠蔽する当局の政治行為に慣れているはずの中国人としての「私」という無力感を表現している。

以下のデータ2においては、調査者Zはデータ1に続き、李文亮への評価について、Wの意見を尋ねる。

データ2 医療従事者への評価：「みんな」と「私」

29. Z ちなみに、李文亮のこと、どう思いましたか↑
 30. W 李文亮に対して(.)実は、多くの人が彼のことを
 31. 讃えて、告発者とか、英雄とか呼んでいるんだろう
 32. Z そう。
 33. W 身近な人に教えただけなので、英雄とか。
 34. そこまで言えないって。
 35. Z うん。
 36. W みんなが一般人だと思いますから、そこまで高く
 37. 評価する必要はないと思う。
 38. Z 英雄とは言えない↑
 39. W：うん。英雄って(1.5)今回の感染症、みんなは(.)
 40. 例えば、医療従事者は英雄だと思うかも。
 41. Z うんうん。
 42. W そういうイメージが常に存在してると思うよ
 43. でもさ、私は(1.2)もちろん、彼らは素晴らしいと
 44. 思うよ。そのうち、確かに意識の高い人がいったが、
 45. 行かざるをえない方もいった。必ずいったと思う。
 46. 今回の感染爆発で、彼らは(.)プロ意識を貫いただ
 47. けかもしれない。
 48. Z うん。
 49. W 感染症と戦うために最前線に駆けつけた理由、人そ
 50. れぞれだけれども、一点取り上げると、事件が
 51. 起こる際に、みんなは事件と関連する従事者を謳歌
 52. し、でも事件が終わったら(2.3)実は、必要な時に
 53. は模範を作り出して、でもそういうイメージや精神
 54. が実際には我々誰にも根強い(持続、根本的)影響
 55. を与えてくれなかったと思うんだ

データ2では、Zの質問に対して、Wは「みんな」(39行目)という一人称代名詞を使用することにより、李文亮を自分(W)と同じ「一般人」の位置をとった。その後の39行目から、WはZの質問「英雄と言えない↑」を受け、「医療従事者」の話題を語り始めた。ここで、彼女は「みんな…と思うかも」(39-40行目)において、再び「みんな」(39行目)という複数人称代名詞を用いるが、43行目の「でもさ、私は…」から見れば、ここでの「みんな」は自分を含まず、自分が「集団」と違う意見を持っていることを示した(43-47行目)。その後、彼女は医療従事者を「素晴らしい」、「意識の高い人が確かにいった」、「プロ意識を貫いただけかもしれない」と主張したが、医療従事者は英雄かどうかを明確に評価せず、さらに、76行目の「一点取り上げると」から、「英雄」というイメージへのコメントに移った。関連する従事者に「英雄」というイメージを付与することについて、Wは「我々誰にも根強い影響を与えてくれなかった」(54-55行目)と述べ、「我々」

という一人称複数代名詞と不特定人称代名詞「誰にも」の使用を通し、社会集団に属する「私」として自分を位置付けた上、不特定の社会集団を代表し、マイナスな評価を与えることを明らかにした。つまり、データ2の医療従事者の話題では、Wは不特定人称代名詞を何度も使い、状況によって自らを集団の中に包摂したり排除したりして、すなわち、「個人意識」を表出する個人のアイデンティティと集団意識を表す集団のアイデンティティ間で揺れていることが明らかになった。

データ3の被調査者Xは北京に在住し、大手民間企業で働いている男性であり、調査者Yは日本に在住している中国人留学生である。以下は医療従事者に関するXの語りである。

データ3 医療従事者の待遇問題：平常時と非常時

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 65. X 中国のメディア： | 76. X 確実な名誉が何もなく(1.0)私たちサラリーマン |
| 66. Y ¥中国メディア¥ | 77. と同じもんだろう。社長に毎日絵に餅を描いて頑張 |
| 67. X ¥宣伝するに決まっている¥やっぱいいことだから | 78. ろうといわれても(0.5)「給料上がらないなんて、 |
| 68. 宣伝すべきだよ。だが、宣伝する際にめっちゃ褒め | 79. Y [現実的だよな] |
| 69. るけど、実際になると： | 80. X 誰がそんな仕事するの↑ |
| 70. Y ああ | 81. Y そうだよ。天災人災といったものはね。一回きりのもので |
| 71. X はっきり言うとか表面的なものにとどまらない | 82. はない。 |
| 72. で欲しい。 | 83. Y うん。そうそう。他の災害も出てくるね |
| 73. Y うん。 | 84. X そう。だから。みなさんに対する説明が欲しいね |
| 74. X 医療従事者は偉大だ。白衣の天使だと高く評価し | 85. Y うんうんうん。 |
| 75. ておいて。アウトブレイクが終わったら補助金等 | |

調査でXは医療従事者の待遇問題に言及し、印象深かったと述べた。データ3は、医療従事者の待遇問題に関するXの語りである。Xは65行目で「中国メディア」といい、語尾を伸ばし、続きは言わなかったが、Yは笑いながら「中国メディア」を復唱した。これを受けてXも笑い出し、「宣伝に決まっている」と補足した(65-69行目)。ここでは、XとYは「中国メディアのやり方に詳しいもの同士」だと明言していないが、笑いを通して「合意」し、インタビュー中の相互行為の場である「今—ここ」(レベル2)を共に構築できたと言える。Xは続いて「宣伝すべきだよ」と述べたが、「だが」と逆接し、「実際になると」と語尾を伸ばして、Yの相槌に応じて(70行目)、「表面的なものにとどまらないでほしい」と明言した。また、Xは「偉大」や「白衣の天使」などメディアで使われた医療従事者の褒め言葉を列挙し、「アウトブレイクが終わったら、補助金等確実な名誉も何もなく」と述べた。ここでは、Xはメディアのやり方に言及し、非常時の医療従事者への賛美の合理性を認めたが、平常時に戻ったら、医療従事者を賛美することだけでは不足であり、補助金を確保すべきだと個人の意見を主張した。さらにXはサラリーマンである自分の経験を例として取り上げ(76-78行目)、サラリーマンを医療従事者と比較した。「社長が絵に餅を描く」ことを「メディアからの賛美」に、「給料が上がらない」ことを「確実なものがない」ことに置き換え、サラリーマンとしての「私」も「医療従事者」も同じく一般人だと位置付け、「給料をもらえるために働く人」というアイデンティティを表出した(レベル3)。そうすることによって、Xは医療従事者を含めた一般人としての「花より団子」という要求の妥当性を訴え、個人の利益を保障する重要性を強調した。その上、Xは天災などというのは一回きりのものではないと述べた(81-82行目)。平常時の待遇問題を適切に処理しないと、今後の新たな災害の際に、「誰がそんな仕事するの」(80行目)と懸念している。

データ4の被調査者Lは杭州に在住し、民間IT企業で働いている女性であり、調査者はyである。以下は武漢封鎖に関するLの評価である。

データ4 武漢封鎖：武漢人と国と部外者の私

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 42. L 両者のどちらの立場にも私は立っていないから。 | 56. L そうよね。一般人としては、あんな状況でどんな政 |
| 43. 私は部外者だから。わかるだろう↑ | 57. 策を出したらいいかわからない当時だったら。ど |
| 44. Y うん。 | 58. んな政策出しても無理があるだろう(0.4)実際 |
| 45. L 武漢の封鎖によって中国のほとんどの地域が | 59. 私たちには想像できないことがたくさんあるだ |
| 46. 守られた。私は大多数の地域に属している人とし | 60. ろう。人類として知らないことがたくさんある。こ |
| 47. て武漢人に同情する。だが、この政策についてコメ | 61. のアウトブレイクに対してどう対応すれば良いか |
| 48. ントしづらいと思う。正しいかどうか分からない | 62. は私たちまだ研究中だ |
- (中略)

Lは「武漢封鎖」について評価を述べた。Lは武漢市民、政策を定めた国という2つの立場を設定しつつ、自分は部外者だと述べた(42行目)。また、そのポジションの妥当性を確かめるために、「わかるだろう」とYに声を掛け、理解を求め

た.Yから肯定的な回答を得てから、Lは武漢の封鎖で「中国のほかの大多数の地域が守られた」と指摘し、自分を「ほかの大多数の地域に属している人」、つまり、「中国の大多数の地域に属している1員」と位置づけたが、「守られている人」とは直接明言していない(45-47行目)。自分のことを「部外者」として位置付けたLは武漢の人に「同情」するが、武漢封鎖の政策について「コメントしづらい」と述べた。Lはさらに「他の大多数の地域に属している人」だから、どのように対応すればよいかわからない「一般人」(56, 57行目)、ウイルスに対して無知な「人類」の一員(60-62行目)と立ち位置を色々と変更した。この位置づけの変化によって、Lは武漢封鎖政策に対してコメントしづらいという意見を説明した。さらに、Lは「部外者」、「一般人」、「人類」などという一般化するような理性的聞こえる一般化名詞を多用し、苦境に置かれたどうしようもない個人というイメージを作り上げ、最終的に客観的な状況を受け入れるしかない「無知な人類」の一員だという位置を示した。話題の進展につれ、個人から集団に属するようになり、集団意識への転移が観察できた。

5. 考察及びまとめ

本文中での参考文献の引用は、以下を参考に行なう本稿は新型コロナの拡大を経験した中国人若者3人を研究対象とし、彼ら彼女らの体験談を通して、中国人若者の意識が「個人意識」と「集団意識」の間で揺れている様子を観察した。体験談の中で、3人の若者は新型コロナをめぐる出来事に関する評価が多いのは特徴的だった。Linde (1993) は出来事の評価の部分は、世間一般に向けられた評価ではなく、語り自身のアイデンティティを示すものであると指摘している。本研究においても、出来事に対する評価を通して中国人若者は自らのアイデンティティを表出していることが解明した。

ただし、データで示したように、3人は新型コロナに関する異なるエピソードを語ったが、政府の対応について述べた際に3人とも中国人としての集団アイデンティティが観察された。その一方、被調査者Wは自嘲気味の評価を通して、「政府の対応への不満」と「関連する従事者に英雄を呼ぶことへの違和感」を表し、自分の意識と主張をしっかりと持っている自分というアイデンティティを表出した。また、被調査者Xは「中国メディアの宣伝への理解」を示しつつ、医療従事者と自分が同じく働く人だと位置づけ、サラリーマンという集団アイデンティティを表出したが、サラリーマンとしての経験を有しているため、医療従事者の辛さを理解できる自分という個人アイデンティティも同時に表出した。被調査者Lは「武漢封鎖という政策に対して評価しづらい」と明言し、「部外者」「人類」の一員などに自らを位置づけ、集団に属していると認めながら、「客観的な自分」というイメージを作り出した。

本研究の分析結果により、中国人の若者たちは物語を描写したり、評価したりすることで、個人アイデンティティと集団アイデンティティの間に行ったり来たりすることが明らかになった。

トランスクリプト記号

(.) 0.2秒以下の沈黙	[オーバーラップ記号°	
(0.0) それ以上の沈黙	¥ 笑いながらの発話	. 音節の区切り
↑↓ イントネーションの上昇と下降	: 音の引き伸ばし	@@ 笑い
____ 強調的に発音される箇所	(:の数)が長さを表す	

参考文献

- Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. In Michael Bamberg (ed.). *Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis*, *Journal of Narrative and Life History*, **7**, 335-42.
- Bamberg, M. (2004). Talk, small stories, and adolescent identities. *Human Development*, **47**, 331-53.
- Linde, C. (1993). *Life Stories: The Creation of Coherence*. New York: Oxford University Press.
- Nisbett, R. (2004). *The Geography of thought: How Asians and Westerners think differently... and why*. Free Press.
- (=2004, 村本由紀子『木を見る西洋人森を見る東洋人: 思考の違いはいかにして生まれるか』ダイヤモンド社)
- 関信平 (2003). 从社会学角度对 SARS 流行事件的反思. 南开学报 (哲学社会科学版), **4**, 13-15.
- 秦かおり (2013). 「なんとなく合意」の舞台裏 在英日本人女性のインタビュー・ナラティブに見る規範意識の表出と交渉のストラテジー. 佐藤彰・秦かおり (編) ナラティブ研究の最前線 人は語ることで何をなすのか ひつじ書房 pp. 247-271.